

1人1人の人生がある

私は、東日本大震災の被災地巡検には2度目の参加をした。なぜ2回目の参加を決めたかという前回の参加以降、ニュースや新聞で東日本大震災についての記事を見かけたら必ず目を通すようになったからだ。前回の巡検より知識を蓄えた状態で参加する被災地巡検では、また新たな視点で学ぶことができるだろうと思い参加を決めた。だが、私は想像していた以上に新しい視点や深い考えを得ることができた。そこで、「感じる」「今を知る」「備える」「伝える」の4つの観点からこの被災地巡検で学んだことを述べていきたい。

1. 感じる

私が今回の巡検で最も印象に残った場所は中浜小学校だった。そこは、海から約400mしか離れていないにも関わらず、小学校にいた90名が助かった場所だ。小学校にいた人々は階段を登った先にある倉庫で津波をやり過ごした。私は実際に中浜小学校に行くことによって文字や映像では知ることの出来なかった当時の状況が見えてきた。屋上に登る階段は急で、1人ずつしか登れない。その前の地震やサイレンで小学生はパニックになっていたであろう。大人だってきっとそうだ。そのような状況の中でこの階段を登るのは、非常に危険だったに違いない。また、避難した人々が一夜を過ごした倉庫は中に入ってみると当時と比べて気温が高く、雪が降っていなかったのにも関わらず、私にはとても肌寒く感じた。その場には避難時用の毛布がいくつも落ちていた。厳しい寒さに耐えながら、明日からどう生きていくか考えた人々の気持ちを考えると胸が苦しくなる。

震災当時の状況や気持ちは私達は想像することしかできない。だが、実際に被災した場所に行かなかつたら、ただの出来事としてしか捉えてなかつたらあつたらあつたら。他人事から自分事にするために自分自身で感じたことはとても重要で、被災地巡検に参加したことはとても有意義な体験になったと思う。

2. 今を知る

震災遺構に行くと地域全体が過去のまま止まっているように思えるが、また同じ場所に住んだり、発展したりしようとしている地域も多くある。一番強く感じたのが名取市閑上地区だ。閑上地区は、沿岸部に位置しているため、建物のほとんどが流された。そのような状況から復興を進め、現在は商業施設である「かわまちてらす閑上」や、津波が来た際に被害を抑えるために、1階部分を駐車場などにして居住空間を上層階に設ける構造の災害公営住宅の設置など、安全で賑わいのある町づくりを目指している。

しかし、そうすることのできない場所がある事も事実だ。右の写真は門脇小学校から撮ったものだ。写真中央にある道路から奥は、災害危険区域となり今はもう住むことができな



い。また、今回の被災地巡検では行かなかったが、福島県では福島第一原子力発電所事故により、住むこと以前に立ち入りが禁止されている場所も多い。私にも事故の影響で新潟に避難してきた友人が何人もいる。東日本大震災は過去に終わった出来事ではなく、今も続いていることを私達は知るべきだ。

3. 備える

被災地巡検の1日目は大川小学校から門脇小学校に行く行程だった。この二校には学校の裏に山があった。しかし、すぐに行動したかしなかったかで、この二校の結果は大きく違うものとなった。他にも様々な要因はあるが一番大きいのはこの点だと感じる。これも自分事として必ず考えなければいけないことだ。もし震災が起きたときに、私は自分の命を救うために行動することはできるのだろうか。名取市震災復興伝承館で説明をしてくださった方は、「準備をしないと動けない」とおっしゃっていた。震災前、三陸沖地震やチリ地震による津波を受けて、避難経路や避難場所、避難の判断基準など避難行動について確認していた学校は震災が起ころうとも助かっていた。明訓も防災訓練をしているが、真の意味で避難訓練になっているだろうか。ただの作業になっていないだろうか。震災時に自分が命を救うことができる行動は今から始まっているのだ。

4. 伝える

前回の被災地巡検を踏まえて、より強く思ったのが伝えるということだ。自分が驚いたのが東日本大震災の震災伝承施設が数十個もあるということだ。そして、VR やタッチパネルなど震災当時は多く普及していなかった技術も用いて震災のことについて伝えている。このように私達は沢山のことを被災地巡検で学んだ。新潟に帰ってきてこの体験を私達の中に止めるのは非常に勿体無い。被災地巡検に参加した私達は、震災伝承の一員になったように感じる。

また、大川小学校にて佐藤敏郎さんが語り部をしてくださったが、その際に「恐怖から行う防災には限度がある。希望があるから人は動く。」とおっしゃっていた。この言葉は家に帰って家族にこの被災地巡検で体験したことを話したときに強く感じた。家族はその被災地で起こったことにしか目を向けてないように感じたからだ。実際に私もこの被災地巡検に参加する前はそればかりに注目していた。でも、震災遺構で伝えたいことはそれだけではないのだ。全ての震災遺構の展示物や語り部の方々は未来のこと、そして私達がどう防災に向き合っていくかを教えてくれた。震災遺構は過去を学ぶ場所以上に「未来を拓く」場所でもあるのだ。

私は今まで被災の状況を単なる数字でその規模の大きさを測っていたように思う。だが、被災した人々には1人1人の人生があるのだ。東日本大震災が起こるまでは、今は被災地で特別な場所は私達が住んでいる場所と変わらなかったのだ。いつどこで震災が起きるかは分か

らない。もしかしたら、数時間後に起きるかもしれない。だから、私達は日頃から災害に備えていく必要がある。震災後に気づく防災ではなく震災前に気づく防災を作っていくべきだ。東日本大震災の教訓が無駄にならないためにも。まずは私ができる備えをしたり、私の周りの人に今回学んだことを伝えていきたいと思う。そうすることで、防災の輪が広がっていき、備えで全ての人々が自分の命を救う要因になることを願う。